

エリート自衛官に溺愛されてる…らしいです？

～もしかして、これって恋ですか？～

プロローグ 再会

横浜よこはまの海は、まああんまり綺麗じゃない。綺麗じゃないけど、溢れんばかりの夏の日差しの下、入道雲はもくもく、空は気を失いそうなほどに真つ青！ となると、そんな海もキラキラして見えてこなくもない。

(それに比べて、私というのは……)

赤煉瓦倉庫あかれんがの近く、横浜港のフェンスに寄りかかり缶ビール片手に空と海をぼうつと眺めている私というのは、この爽やかな空間においても異質。でもいいじゃないですか。しようがないじゃないですか。まさか今日、会社が潰れた上に、長年付き合った彼氏と別れるとは思いません。じゃないですか。

ひどい。神様がいるのなら、ひどい。

と、そこまで考えて——私は深く考えるのを放棄ほうきした。深いのも暗いのも、苦手なんです。

ぐいー、とビールを飲み干して、鼻歌。晴れてるし、ビール美味おいしいし。観光客が不審な目を向けてくるけれど、別にいい。こんな日くらいは、許されていいはずだ。

——なんてことをぼうつと考えてると、ぼん、と頭を叩かれた。

「……ん？」

振り向くと、白い男の人がいた。

……いや、肌自体は日焼けしてる。服装が白。私は首を上に向けて、その人を確かめる。随分と背が高い。その整った顔面には、バツチリと見覚えがあった。

「……康ちゃん？」

「なにをしているんだ、凧子」

「なにしてるって」

私は彼の服装を眺めます。何年ぶりに会うかわからない幼馴染の服装。軍服、と呼んてしまいうになる、その制服は。

「……あー、あー、そうだ。康ちゃん、海軍さんになったんだ」

それも、防衛……なんだっけ、大学校かなんかを出たエリートさんだ。将校さんだ。知らないけど。

「……海上自衛官」

冷静に訂正してぐる落ち着いた声色に、私はふふふと笑った。相変わらずだなあ。

「所用があつてこちらまできたら、明らかに不審な女性がいて——顔を見たら凧子だった」

「不審かなあ」

「缶ビール片手に歴代歴史ドラマのオープニングを年代順に鼻歌で歌うのは、どう考えても不審だ」

「わかるのがすごいよ！」

ケタケタ笑って、記憶より少しがっちりした彼の背中を叩く。

「酔っ払ってるな」

「仕方がないではないですか」

私は事情を説明する。今日をもって無職になったこと。しかもさっき、恋人にふられたこと。

「どーしたもんかなあ〜」

空は眩しくて、青い。潮の香りが、鼻孔を満たす。

「とりあえず就職だなあ」

恋人はいなくても生きていけるけど、仕事がないと食べていけませんからね。

康ちゃんは黙ってる。黙って、なにか考えて——こういうときの彼は、良くない。

私はつつつ、と目線を逸らす。昔から、そうなんだ。こういうときのこのヒトは、なんだかよくわからない提案をしてくる。

「ふーんふーん。私そろそろ……」

「凧子」

康ちゃんは私の手首を掴む。む、強いぞ！

「結婚しよう」

「康ちゃん、相変わらず突拍子もないな!？」

私は、半袖の白い制服を着ている康ちゃんを見上げる。真剣な眼差しで私を見ている彼は、割

と強面系な男前で、頭良くて運動できてそりゃ女性におモテになるでしょうってアレなんですけど——産まれたときから幼馴染な私はよく知ってる。

この人、ちよつとアホなんです。

1 ダンゴムシのおもひで

康ちゃんこと、鮫川康平氏は小さい頃からボケーっとしていたのですが、私は彼に輪をかけてボケーっとしていたので、私たちは幼い頃から周りに迷惑をかけて生きてきました。

今思えば、あんなに大量にダンゴムシを集めなくて良かった（お母さんの悲鳴がすごかった）。

今思えば、自転車チキンランなんかするんじゃないやなかった（骨折った）。

今思えば、なんで公園にお手手繋いで歩いて行って、二駅も離れた駅前の交番で保護されたんだろう（ふたりで蝶々を追いかけた、のだと思う）。

でも、康ちゃんは大きくなるにつれて、そんな部分を内側に隠してしまった。

中学あたりになると、もうみんなあのヒトがボケーっとしてたことなんか、完璧に忘れちゃってそう、ボケーっ仲間を置いて、さっさと精悍な男の子になってしまったのでした。

「鮫川くんかっこいいよね」

「ねー！」

私は友達がそんな風に喋るのを「けっ、あんなの猫ですよ、猫被りですよ」と思いながら、康ちゃんが「きりっ」として姿勢良く歩くのをぼんやりと見ていたのです。

（でも、なんでだろう）

ふと思いつき、きりつと精悍モードな康ちゃんですが、私とふたりだと……すっごい、リラックスしていたのでした。でも高校を卒業して（高校までは同じ学校だった）そこから会わない間、康ちゃんは「きりっ」としたまま、生きてたんだろうか。

……いやまあ、たまに帰省して顔合わせたらやつぱりへにやつて表情崩していたから、常にじゃないんだろっけれど……でもさ。ちから、ぬけよなく、とは思う。ずっと「きりっ」としてるの、疲れないのかな。

「……帰れ」

「なぜだ」

職を失った以上、とにかく節約！ と実家に帰って数日。ピンポンと鳴ったインターフォンに、ガチャリと玄関を出てみれば……そこにいたのは「きりっ」とした康ちゃんだった。記憶より精悍さを増した眼差しに、一瞬怯む。

「……っ、それはなに」

「薔薇の花束」

「薔薇？ なんのために」

「プロポーズだ」

気が抜けた。気というか、力が抜けた。

「……なんのために？」

「なんのため」

康ちゃんはさつさと「きりっ」モードを解除してリラックスモードで私を見ている。でもどこか、いつもと違う。ちよつと緊張……しているような？

「……結婚したいから」

「……ほえーん」

私はボケーつと康ちゃんを見上げる。

彼はなんだか悲しそうに私を見た。……そういう、捨てられた子犬みたいな顔やめてよ……

結婚、結婚かあ……あんまり縁がなさそうかなど思っていた「それ」について、ぼうつと考えた。なるほど、我々ももうじき、三十路みそじに足を突っ込む。なにやら真剣に私を見つめ続けるこの幼馴染に結婚願望があったって、おかしくはない。お兄さんのしゅーちゃんも、弟のりよーちゃんも、結婚したとか聞いているし。なるほどねえ。

「でも、なんで私？」

「凧子といると、素の俺でいられる。傍にいてくれ」

なるほど……？

つまり楽だから、つてことかな？ たしかに、私となら楽なんだろうな。なにしろ、きりつとし

なくていい。それは幼馴染ゆえ、恋愛感情もなくゆつたり過ごせる、というところなのだろうけれど。

「凧子は俺じゃ嫌か」

「嫌とかじゃなくて」

「じゃあいいじゃないか」

「……いいのかな」

いいんだっけ？

「あらあらあらあら、康平くん！ 久しぶりね」

背後から現れたのは、お母さん。不思議そうに康ちゃんの持つてる薔薇ばらの花束を見ている。

「それなあに？」

「凧子さんに」

きりつとモードになった康ちゃんはきりつとお母さんに言う。目つきが違うよ。

「プロポーズを」

「ブ、プロポーズ!？」

お母さんは飛び跳ねた。文字通り、飛び跳ねた。

「な、なあんだ凧子っ。ずつと付き合ってたのつて、康平くんだったのー」
頬を赤くして、お母さんははるるんと言う。

「ちが」

「早く言つてよお！」

「ちが」

プロポーズシヨックで、いつにも増してボケーっとしてるので、うまく言い返せない。

大学からずうっと付き合つた彼氏は、私が無職になると知るやいなや「オレに寄生すんのはやめてくれよな」「就職するまで連絡すんなよ」「女は楽でいいよな」と言つて離れていきました。

……せちがらい。でもまあ、そんなにシヨックでもなかったな……。もはや情性^{だせい}だったもんな。

「お母さん」

違うんだよ、と言おうとして——お母さんが泣いちゃったから、ワタワタ戸惑う。

「風子が幸せになるのね、ほんとに、ほんとに嬉しい……」

「お母さん」

今の「お母さん」は、私じゃなくて康ちゃん。

「風子さんを、必ず幸せにします」

「よろしくね、康平くん……！」

「風子、本当だぞ」

私に向かつてそう言う康ちゃんは、ちよつときりつと、精悍^{せいかん}モード。こういう顔されるとドキリとするからやめて欲しい！ なんていうか、リラックスしてるときとの落差がすごい。

なんか、このヒト……こんな性格で、本当に自衛官なんてできてるのかなあ。

(見ててあげなきゃ、いけない気がする……)

だって、なんか——想像してしまった。結婚したいからって幼馴染に薔薇^{ばら}の花束持つて突撃するような人、多分……私が断つたら、変な女に引つかかりそう！

(気が付いたら、身包^{みぐる}み剥^はがされて横浜港に……)

そ、それはいやだ。いくらなんでも、幼馴染の葬式にはまだ出たくないよ！

そうして、気が付けば——流されるように。

私の左手薬指には、銀色の指輪が光っていたのでした。

2 正直、自分でも病んでると思う(康平視点)

ずっと風子が好きだった。

いつから？ そんなの、気が付いたらだ。彼女の前では、素の自分でいられる。ころころ変わる表情も愛おしい。でも俺が告白する前に——風子に彼氏ができた。中二のときだった。

(……別れたら告白しよう)

少し酷いとは思っけれど——そう思っていたのに。

ヒトの不幸を願つた罰か、風子は驚くほどに、恋人が途切れなかった。男を取つ替え引つ替えていた、というわけではなくて長く続くのだ。風子といるのは、心地がいいから——だと、思う。みんなそうなのだろうな、と仲睦まじげに歩く風子とその恋人を、高校まで見続けた。

(……不毛だ)

凧子を忘れようと、誰かに告白されたら付き合った。けれど、長続きしない。割とすぐふられた。多分、伝わるなにかがあったんだろう。申し訳なかったと——そう思う。

凧子の隣にいたい。けれど、凧子の隣にはいつも別の男がいた。

(……不毛だ！)

自らを鍛え直さなければ。俺はなにを考えたのか(まあ、性に合っていたから結構だったが)防衛大学校に進み、その後江田島沖を泳いでいた。十五キロ遠泳。およそ八時間に及ぶそれを、泳ぎながら考える。

ああ凧子は、今頃なにをしているんだろう。

(……不毛だ)

眩しい夏の太陽も、苦くて潮辛い海の味も、厳しい訓練も、なにも——俺から凧子を消してはくれなかった。

任官してからも、海を見ては凧子を思い、空を見ては凧子を思う。ひどいときは魚雷を見ても凧子を思い出した。なぜだ。自分でもわからない。末期だ。

だから——たまたま凧子と再会して、凧子がフリーだと知って。考える。

凧子はぼんやり、と俺を見上げていた。おひとりした凧子。可愛い。……いや可愛い、じゃなく。て。

(これを逃せばチャンスはないぞ)

凧子のほっそりした手を掴む。不思議そうな凧子に——気が付いたら、プロポーズ、していた。頭をフル回転させる。凧子は優しいから、多分……押ししたらいける。予想通り、凧子は最終的には頷いてくれた。押し付けた薔薇の花束を抱えてのんびりと微笑んで、「康ちゃん、私がいなきゃだめそうだから」と。

「その通りだ」

俺は答える。

「凧子がいないと生きていけない」

「ふうん」

凧子はとても不思議そうに首を傾げた。

「自覚あるんだ」

「ある」

なんだ、伝わってたのか。きみがいないと、俺は生きていけないってこと。

ほっとしながら、改めて口にする。

「結婚してください」

「うん、いいよー」

おっとなりと凧子は言った。その日の夜は——眠れなかった。

その後は順調だった。両家の顔合わせ(と言っても実家は近所同士、単なる和気藹々とした食事

会だった)、結納、式場の決定、新婚旅行の手配。その間に、凧子は自宅でできる仕事(データ整理らしい)を見つけてきて、その合間に結婚式の準備をしてくれて――

「婚約者が寂しがってくれない」

「……まあそんなもんですよ」

部下は呆れたように言う。ここ最近、凧子の話しかしていないので、少し呆れているのだろうか。二ヶ月にも及ぶ、外洋での派遣訓練。出発前に凧子に会ったけれど「船酔いにはこのツボがいらいらしいよ」と手首をぎうぎう押されただけだった。

「俺が一体、なんの仕事をしていると思ってるんだらう」

防大時代の乗艦実習では、散々吐いたけれど――三半規管が麻痺したのか、任官以降はそういうこともない。もつとも、酔う人は酔うので、丈夫な身体に産んでくれた両親に感謝するばかりだ。

「まあ、式を楽しみにしてますよ」

その言葉に、思わず頬が緩む。そうだ、この訓練が終わりさえすれば――凧子と結婚する。式に、新婚旅行。

「……結婚したら、手を出していいだろうか」

「は？」

訝しげな部下に、言い訳のように口にした。

「大事すぎて、手も繋げてない」

「えええ……」

今度こそ引かれている。引かれているけれど仕方ない。

「嫌がられて結婚やめる、とか言い出されたら困る」

「はあ、そうですか」

難儀な恋をされてますね、と部下は言う。

(難儀な恋か)

なんとなく――その「難儀」は続きそうな、そんな予感がして――できればそんな予感の外れればいい、とそう思った。

閑話 鮫川康平という人について(部下視点)

鮫川康平一尉は、もつと……こう、とつつきにくい人だと思っていた。

そもそも背が高く強面なほうだし、険しい顔つきも、部下からすればちょっと近寄りたがたい雰囲気がある。そのうえ異様なほどに優秀で、なんでも防大は主席卒業らしい。日常の訓練や業務でも、それは痛いほどわかっていた。おそらく三佐昇進は、鮫川一尉が一番乗りだろう、との信憑性のある噂も。

こちらがミスしたとき、鮫川一尉は決して激昂したり感情的になったりすることはない。たとえ小さなミスだとしても、どうしたって自分の、誰かの命に関わる。特に艦艇の上では。それに対す

るリカバリー、適切な指示。頭の回転が速すぎて、オレはあの人の頭には機械が詰まってるんじゃないか、と時々思う。

そんなこともあって、一尉いちゑいのことは怖いけれど、尊敬する上司でもあった。とはいえ、とっつきにくいのはとっつきにくい、と……

そんなイメージが変わったのは、一尉いちゑいが婚約したと聞いてお祝いの言葉を贈ったときのことだった。

「……ありがとう」

本気で嬉しそうな顔をして、一尉いちゑいは頬を緩めた。思わず目を瞠みはる。

(……この人、こんな顔をするのか)

驚いているオレを尻目に、鮫川一尉いしづかはいかに自分の婚約者が素晴らしいのかを滔々たうたうと語った。まるで数学の公理を解説するかのごとく、あたかも当然のことを説明するかのように、しかし熱のこもった口調で語る、鮫川一尉いしづか。

……なんだこれ。

「すまん、惚のろけ気でしまった」

「いえ」

ノロケ。ノロケだったのか。

この人、惚のろけ気るとかあるのか。

少し驚いたけれど——この人にも意外と人間らしい感情があるのだ、ということにオレはなん

だか、随分と……なんというか、ほっこりしたのだった。

3 え、するの……です？

新婚旅行先のハワイのホテルで、私はボケーッと康ちゃんがお風呂から上がるのを待っていた。

「……先に寝てていいかな？」

というか、バスローブで初めて着たけど、このまま寝て良いのかな？ 時差でいつも以上に頭

がボケボケしている自覚はある。

成田なりたからホノルルに着いて、荷物をホテルに置いたらそのままトロリーバスで観光。

康ちゃんは英語ペラッペラなので（一日中きりつとしてた）、私はボケーッと「海あおい」とか言っただけ。……ハワイまで来て「海青い」しか感想がないのもどうかと思うけれど。

(てか、案外寒そうだなあ)

なんとなく一年中、常に海で泳げそうなイメージだったし、実際に泳げるらしいけど、三月の今日本で言うとう海開き頃の水温らしい。いちおう水着は持ってきたけれども。

ガチャリと寝室に康ちゃんが入ってくる。なんかイマイチよくわからない表情をしていた。頭を拭いている。彼も白いバスローブ。

「どうしたの？ 康ちゃん」

「ん、あ、いや……」

なんかモジャモジャ言いながら、康ちゃんは私の横に座った。沈むベッド。……これ、お高そうだよな。

(……あ、疲れてるのかな)

一日中「きりっ」としてたもんね。まったく、旅行中くらいボケーっとしたらいいのにさ。

「ん」

私は手を伸ばす。康ちゃんはなぜかびくつとした。

「どうしたの？」

「え、あ、いや、その」

「タオル貸して。拭いてあげる」

返事は待たずに、タオルを取ってごしゃごしゃと短い髪を拭いてあげる。

「通訳おつかれさま」

「……いや、全然」

「助かったよ。ありがとう」

顔を覗き込む。康ちゃんは、なぜか——また、捨てられた子犬みたいな顔をした。

「どしたのー？」

「凧子は……俺と結婚して、良かったのか」

「……？」

私と結婚したい一心で、あれだけ強引にプロポーズしたくせに。私がいないと、変な女に引っこりそうな自覚があるとまで言っていた(多分)のに。

「え、康ちゃんやっぱ嫌だった？ 私とは」

飛行機の中で冷静になったのだろうか。さつそくバツイチはなんかヤダなあ、と眉尻を下げると

「馬鹿な」と彼は少し大きな声を上げた。

「凧子がいい」

「ん？ あ、そう？」

じゃあなんでかな。

「凧子が、どう思っているのかと……」

彼の小さな声に、首を傾げた。

康ちゃんとの結婚かぁ。……まだ、生活自体はなにも始まってないし、なんとも言えないけれど……今のところは。

「楽しいよ」

「……楽しい？」

「うん」

康ちゃん、おだやかだし、今回の旅行で思ったけど、案外(失礼かな)頼りがいあるし、お互い性格わかっているから無理なくいいし。そして一番良いのは、いつも機嫌がいいこと。元カレがかなり気分屋だったからか、すっごい楽。なんで怒ってるか考えなくていいし。

ま、その辺はお互いボケーっとしてるからね！ にこりと笑うと、康ちゃんは安心したように微笑んで——私の頬に手を当てた。

「良かった」

そう言つて——重なる、唇。

(……!?)

結婚式だつて、おでこにだった、チュー。案外と柔らかなそれが、少し離れてはまた触れて。あれ、あれれ？ こ、こういうの、しないのかと思つてた……。心地よさになんだかどろん、としながらキスされ続ける。角度が変わつて、熱い舌が口内へ侵入^{はい}つてきた。

「……ん、っ」

思わず上がった声に、康ちゃんがびくりと動く。手首を掴まれて、抱き寄せられて、さらに深く。(……赤ちゃん作る時だけかなと)

ぼうっとした頭で考える。だつて、婚約期間中、まったく手を出されなかつたし。子供はもう少し先かな、つてふたりで話してたから——そうかな、つて。唇が離れて——目が合った。

(……わ)

どきり、とした。知らない目をしてた。ボケーっとも、きりっ、ともしてない……。熱い、目で。するり、とバスローブを脱がされる。恥ずかしくて身を縮めた。

「凧子」

宥^{なだ}めるような、甘い声。見上げると、優しげにおでこにキス。

「見せて」

「……や、だよう」

「いいから」

ほすり、とベッドに押し倒されて……。まじまじと見つめられる。うう。胸を手で隠して、縮こまる。

「凧子」

困つた子供にかけるみたいなの、優しい声。康ちゃんもさつさと裸になつちゃう。……。あ、腹筋。むきむきじゃーん、なんて感心しながら……。目に入って、うわあつて顔を背けた。康ちゃんのおつきくなつてるし！

「は、早くない？」

「……我慢してた、から」

「そ、そうなの？ 結婚する前から？ あの、早く言ってくれて良かったのに」

私は康ちゃんを見上げる。整ったかんばせが、なんだか切なそうに見えて、ちよつとドキリ。

「……いや、うん」

彼はまたもやモゴモゴしてる。モゴモゴしたまま、私の頬に口付けて。そうして、恐る恐る、つて感じて——私の胸に、触れた。まるで壊れ物に触るみたいに。

「……っ」

小さく、声が漏れた。久しぶりだからかなあ。心臓がどきどきして、うるさい。多分、顔真っ

赤……。そのまま、ゆるゆると揉まれる。康ちゃんの手のひらがその先端に触れて。擦れる感覚に、声が零れる——ああ、こんなの聞かせたくないよ！ 恥ずかしいよ！ お互いオムツしてるときから知っているのに！

「ふ、あ……っ、んッ」

でも零れる。恥ずかしすぎて、口を両手で塞いだ。

「凧子」

また、宥めるような甘い声。

「聞かせて」

「……っ、うう……」

簡単に手を外されて、康ちゃんは私の胸の先端を口に含む。

「ッ、ああ……っ、やッ」

口内で舐めて、甘噛みをして、舌でつつく。そのたびに私は恥ずかしすぎる声が溢れる。

「や、だよおっ、康ちゃん、こおちゃ、んっ」

「……うん」

なにが「うん」なのかわからない。わからないけれど、康ちゃんはやめてくれない。つぶんと音をさせて康ちゃんは私の胸から口を離す。そうして、私の腰骨に手を伸ばして——下着をずらした。

「いいか？」

康ちゃんの、少し掠れた声。……緊張してる？ 私は少しそれに安心して、小さく頷いた。この期に及んで「やっぱなーし！」はしない。しないけども、恥ずかしすぎてモジモジと下着を脱いだ。
(わ、どうしよ、濡れてる)
は、恥ずかしい……。シュンとして目を伏せた。

4 あまりに愛おしすぎて(康平視点)

凧子の頬は、驚くほど赤い。炎天下の運動会でも、ここまで赤くなかった——そう思うくらい、赤い。大好きな瞳は、欲情で潤んでいる。

(……壊してしまいそう)

大事に大事に——しないと。タガが外れてしまって、めちゃくちゃに抱いてしまいそうだった。ガラス細工にでも触れるように、そうっと触れた熱い柔肌。漏れる吐息。脱がせた下着は、濡れていて。ごぼりと欲望が湧き上がる。このまま挿れてしまいたい。挿れて、欲望にまかせて——いや、落ち着け。嫌われたらどうする？ 初夜で、そんな……がつつくような真似は——そうだ、格好悪いし。

……格好悪いからなんだ。何年我慢したと！

「……康、ちゃん？」

凧子の声に、我に返る。

「わ、たし……なにか、へん……?」

不思議そうに凧子は言う。凧子の身体を凝視しながら、俺は無言だった、らしい。

「変じゃない。綺麗だ」

慌てたように言うと（少し早口になった）凧子はなにが面白かったのか、擦る（すく）ように笑った。その頬にキスをする。凧子はびっくりしたように俺を見る。その唇にもキスを落とす。それから手に、首に、鎖骨（きぼね）に――

愛おしい。好きすぎて苦しい。夢じゃないだろうか。凧子が、今俺の腕の中にいるなんて。

臍（へそ）の横にキスすると、擦（く）ったかったのか、凧子が笑う。その横腹に、軽く噛み付く。

「っ、あ、うー!」

反応が可愛すぎて、それだけでいきそう。太腿（ふともも）にも、唇を落として――っ、と舐めながら内腿（うちもも）に。

「や、あ、ねえっ、康ちゃ、そこは見ないで」

「うん」

返事をして、でもそれには従えない――ぐっと足を開く。

「や、だつてえっ」

凧子は往生際（おうじょうぎわ）が悪く、膝を合わせて手を置いて抵抗する。可愛らしい抵抗すぎて、かえって劣情（あせ）を煽（あお）っているのに気が付かないものか。構わず、濡れて溢れているソコにも唇を落とす。凧子の、味。

「ふあ、あんっ」

凧子の腰が揺れる。凧子は俺の髪を、軽く軽く掴む。

「や、だつてえ……ッ」

「……嘘つき」

思わずそう言ってしまう。凧子の腰は、キモチイイところに触れて欲しいのか、揺れてイヤらしい。お望み通り、と舌を這わせる。

「っ、ふ、あ……、あ!」

凧子の肉芽が、刺激を欲しがって赤くぷくりとなつて俺を誘う――から、舌を伸ばす。

「や、やあつ、ああッ、こおちゃ、んっ、ソコだ、めえっ」

イヤイヤと首を振るくせに、俺の頭に触れる凧子の両手は引き離そうとはしていない。いや、むしろ――

「ココ、好きなんだな」

「や、そんな、ことっ……!」

甘噛みをすれば、ビクビクと凧子の腰が跳ねた。凧子のナカから、とろりとろりと溢れてくる液体。それは快感によるもので――。凧子を覗き込むと、はははふと息をして、瞳はトロリと俺を見て蕩（とろ）っていた。

「……イった?」

凧子は頬をさらに赤くして、ふいっと目を逸らした。可愛すぎて、抱きしめる。

「康ちゃん、ずるいよう」

「なにが」

「あんなどこ、あんな風にされたらイクに決まってるじゃんっ」

照れ隠し(?)で怒っているらしい。可愛い。なんかズレてる。ちゅ、と唇にキスを落とす。

「……変な味〜」

凧子は小さく笑った。

「凧子の味だ」

「……むう」

妙な顔をして凧子は唇を尖らせるから、そこにまたキス。キスしたまま——指を蕩けきったナカに挿し入れる。

「っ、あう、う」

唇越しの、くぐもった甘い声。表情を見たくて、唇を離す。

(……おんな、の顔だ)

初めて見る表情。仕草。凧子が今まで俺に見せてこなかった——おんなの、凧子。おとこを欲しがる、淫らなナカ。それが余りに愛おしくて可愛くて……あ、やばい泣きそうだ。

ぐっと我慢して、凧子のナカを指で探る。きゅんきゅんと吸い付くソコは、熱くて狭くて、蕩けて。

「っ、ふあ、あ、あ、ッ、やあっ、らめ、っ」

指を動かすと、凧子は淫らに啼く。

ここに、……挿れる？ 俺の、を？ 呼吸が荒くなりそうなのを、ぐっと耐えた。指を増やして、ぐちゅぐちゅとかき回して——びくん！ と凧子が反応する。

「ここ？ 凧子」

「や、っ、う、んっ、そこっ、気持ちいい、いっ」

凧子の声が蕩けている。完全に抵抗をやめたのか、素直に俺にされるがまま、蕩けて。

「っ、あ、きちゃ、う、きちゃうっ、こーちゃん、っ、イ、くっ、イく、……ッ！」

素直になった凧子は、最高に、……エロかった。シートを握りしめて、自分から足を開いて、びくびくと震えながら、ナカはぐちゅぐちゅと吸い付いて俺の指を啜え込んで。

荒い呼吸を繰り返す凧子から、そうっ指を抜いた。くちゅん、とイヤらしい水音。くてん、と力を抜いた凧子……は、俺を見てムニヤムニヤとなにかを言う。

「どうした？」

「あの、……おつきくなってるね？」

「ん？」

さっきも同じことを言っていた。不思議に思いながら頭を撫でると、「さっきより」と言い添えてくる。俺はそれに、なぜだか神妙に頷いてしまう。

「ものすごく興奮してるからな」

凧子は驚いたように俺を見る。

「こ、興奮？ 私だよ？ 興奮する要素がどこに」
「全部」

可愛らしい口を無理やり唇で塞いで——それから凧子の、なかば力が抜けた足をぐっと開く。凧子の蕩けて、欲しがってヒクヒクしているソコに、自分のものをあてがい、凧子を見つめた。

「挿れる、ぞ」

凧子は一瞬、息を呑んだ。それからゆっくりと頷き、……首を傾げる。

「優しく、してね？」

ふっん、と理性の糸が切れる音がした。

5 優しくって言った、けど

「優しく……しようと」

康ちゃんは、ふう、と息を吐く。そうして続けた。

「優しくしようと、思っていた」

「……？」

やたらと真剣な彼を見つめた。視線が絡む。とろりと溶けそうなほど熱い視線。ギラギラして、……こんな康ちゃん、知らないよ。

(こわ、い)

……でも、こわいのに——私は自分の身体の中心が、ズクリと疼くのを覚える。端的に言うならば、それは——欲情。

この人が、ほしい。

「こ、ちゃん」

「……なんだ？」

ギラギラした目のまま、でも手つきは優しく私の頬を撫でる。

「優しく、しなくて、いいよ」

「……？」

「こーちゃんの、好きに、……して？」

康ちゃんは一瞬、虚を衝かれような顔をして、次の瞬間には私にべろちゅーしてた。

「んっ、んあ、……ふ、ッ」

そのままぎゅうぎゅう抱きしめられて——離れた康ちゃんは、私の足をぐ、とまた開いて。ぐちゅ、と私のナカに、少し焦るように挿入ってきた。熱い、……康ちゃんの。

「っ、あ、あー！」

私は思わず身体が跳ねる——だって、おつきくて、熱くて……

「っ、あまり締めるな、凧子」

なにかに耐えるような声。そうして「……狭」と康ちゃんは呟く。……多分、私が狭い、んじや

なくて、……康ちゃんのおつきいよう！ 私のナカをみちみちと拡張してく、熱さ。ナカはそれでも、きゅんきゅん悦んで、トロトロになつてるのがわかる。

康ちゃんは少しだけ心配そうに私の頭を撫でた。目が合う。小さく頷くと、ぐ、と康ちゃんは腰を進める。

「っ！ ふ、……あ」

「……全部、挿入った」

康ちゃんの、どこか満足げな声。私の腰を持って、康ちゃんは息を吐く。

「凧子」

名前を呼ばれて、視線を上げて——目が合ったまま、康ちゃんが動くから。

「っ、あ、あああんツ!？」

ばちゅん、と——康ちゃんの抽送でイヤらしい水音が、して。絡み合う視線。目でも——抱かれてる、みたいで！

(なにこれ、恥ずかしい！)

思わず外した目線、動かした顔をぐいっと戻される。

「凧子。ちゃんと俺を見て」

「……っ、うう」

なぜだか、言う通りにしかできなくて——見つめ合ったままに、ばちゅばちゅとナカを突かれる。「っ、あ、あ、あ……!」

ナカが蕩けて、死にそう。自分のナカが、きゅうつと締まって、康ちゃんから搾り取るうとしてるのがわかる。こんな——オンナ、だったっけ？ 私。

止まないイヤらしい水音、外してもらえない視線、蕩けるナカが収縮し始めて。

「っ、あ、ソコ、……っ、康ちゃ、ん、きちゃ、あ……イ……きそおっ」

目線がぼつちり合ったまま、私からは恥ずかしい、そんな台詞が口から零れる。

「うん、いつて、凧子」

「っ、あう、っ、こ、のまま……?」

眉尻を下げる。こ、こんなに、じいつと見つめられたまま!

「そのまま。いくところ見せて凧子」

「や、だよお……っ、なんでえっ?」

抵抗しながらも、高まつていく感覚。止まらない抽送。くちゅん、くちゅん、つて擦れる水音。

「なんで」っ」

康ちゃんはなぜだか少し——笑った。ちよつと寂しそうに。

「ずつと、……見たかったから」

どういう意味、と思ったけれど、もう次の康ちゃんの抽送で、ソレが奥をぐつて突いて——私の頭はスパークしてしまふ。

「っ、あ、あ! イ、くつ、いつちゃ……あ! あ……!」

康ちゃんに目で犯されるみたいに、そんな風に見つめられながら——私はさすがに目を逸らして、

とうか気持ち良すぎて目を閉じて、私の頭の横にあった康ちゃんの手首を掴んで——いった。

(あ、あ、あ……きもち、いい)

脳味噌まで痺れる快感に——意識がトロリと蕩けそうになった刹那、ぐ、と奥に無理やり与えられた快楽に、私はハッと目を開けた。

「や、……あつ、康ちゃん、つ、わた、し、イってる………とこっ！」

「知ってる」

ぐちゅんぐちゅん、と水音が響く。康ちゃんのはあ、と息をついた。それは康ちゃんも「キモチイイ」って思ってる、そんな息で——なんだか私はキュンとなった。

「知ってるけど、……風子、意識飛ばしそうだったから」

「んっ、おき、たっ、起きたあつ、だから」

いったばかりの、……というか、まだキュンキュンしてるナカに、なかば強引に与えられる快楽。それはいともあつげなく、次の快楽の波を連れてきて。

「や、だあつて、ば、……あ、っ！ 康ちゃ、また、イ……くっ、やめ、てえっ」

「イけばいい」

低くて、掠れた声だった。その声が、余計に私の中の悦楽を刺激して。

「んんんっ、んあッ、ああッ、イク、つ、康ちゃ、こうちゃんっ、こうちゃん……！」

淫らに、康ちゃんの名前を連呼しながらナカをキュンキュン収縮させて、私は彼にしがみつく。ぎゅ、と抱きしめ返してくれる、おっきな身体。

「風子」

耳元で、名前を呼ばれる。

その響きはまるで、愛おしい人に対するものに思えたから、……なんだか甘えたくなくて。

私も小さく、呼び返した。

「康ちゃん」

康ちゃんは、なぜだかほんの少し戸惑って——そうして、私の頬にキスをした。

愛しい誰かに、そうするみたい。

6 まったくもう

康ちゃんは実は割と——人の影響を受けやすい、と私は思っている。だって、私がハマったものに康ちゃんもすぐハマっていたもの。中学生の頃とかのことだけど。漫画もゲームも、すぐに……今も、そうなのかなあ？

ホノルルのあるオアフ島から、ハワイ島へ移動したその日。やけに黒い砂浜（溶岩らしいです）を見学しながら、観光ガイドのおじさんが、私たちを見て言った。私たち………っていうのは、私と康ちゃんだけじゃない。ハワイ島を巡るそのオプショナルツアーは、たまたまだろうけれど新婚旅行で来た人が私たちの他にもいて。で、まあとにかくそのおじさんは言ったのだ。

「新婚サンたち、ちゃんと愛してるって伝えないとイケませんよ」
アロハシャツを着ている日系人のおじさんは陽気に言う。

「ボクは結婚三十年目だけだね、夫婦円満の秘訣は毎日愛してるって奥さんに伝えることだね！」
私はなんとなく、康ちゃんを見上げた。彼は……ものすごく真剣な顔をしている。……こういうときの康ちゃんは、なにかしでかすときの康ちゃんです。

「凧子」

「言わなくていい」

「愛してる」

「言わなくていいってば！」

てかアナタ、私とは楽だから結婚しただけでしょうに！

「お、さっそく実践ですか！」

ガイドのおじさんに続いて、老年夫婦が「若いっていいわね」とからかうように言う。私はヒヤアアと真つ赤になって下を向いた。

「いいですねー、毎日三十回は言ってくださいね」

「三十回」

ふ、復唱しなくていい……！

私は康ちゃんの手をぎゅうつと握る。痛くしてやろうと思ったのに、悲しいかな握力のなさから、単に手を握りしめただけになった。康ちゃんは少し嬉しそうにしている。むう、一体なにを考えて

いるんだろう、この幼馴染……突拍子もないからなあ。

その日の夕食、なんだかやたらと薄暗いホテルのレストランで（ムーディなのか、なんなのか）お花とかいっぱい載ったアボカドと海老のサラダをもぐもぐ食べていると、康ちゃんがなにげない顔で私の手に触れる。

「……なあに？」

「いや？」

……エッチしてから、なんかこんな感じ、だなあ。常にどつか触られてるっていうか。そう、昼間もずうつと手を繋いでいたし。ボケーつとそんなことを考えていると、つつ、と腕の内側を指で撫であげられる。

「っ、ひゃあんっ」

思わず声が上がって、それからふうと康ちゃんを見上げた。

「やめてよう、さつきから」

「……いや、凧子。それがだな」

康ちゃんはボケーつとした顔のまま、私を見つめる。でも、その目が少し……ぎらぎらしていた。
「勃った」

「たっ……!?!」

なぜ？ なぜに？ なぜそんなに元気なのですか我が幼馴染よ！

「したい。部屋帰ろう？ 凧子」

熱い声。でも私はちよつとムツとする。なんか、なんか……康ちゃん、えっちばっか！

「……デザート、パンケーキ、頼みたいの」

「ルームサービスがあるらしいぞ」

「でもー」

「凧子」

おねだりするみたいな声に、ムツとしたのも忘れちゃって。

「……これ食べ終わったら、ね」

そんな風に返してしまつて……私、甘いかな。結局ぐずぐずになつて部屋に帰つて、ひゃんひゃん啼かされて。くてん、と力が抜けた私を抱きしめて、彼は言う。

「愛してる」

私はむう、と眉をひそめた。またもう、すぐ影響受けてー！ でも、なんだか甘い声なその台詞せりふに、どこか……胸の奥がきゅんとしているのは、事実だった。悔し紛れに、唇を尖とがらせる。

「そ、その割にはえっちばっかじゃん」

「……？」

「康ちゃん、えっちしくて結婚したの？」

私の言葉に——康ちゃんは、固まった。

え、なにに？ ぼうつと彼を見ていると、康ちゃんは見る間に……真っ青になった。

「こ、康ちゃん？」

「違う……」

彼は私をぎゅうつと抱きしめる。

「違う」

「う、うん。わかつてるよ」

私は慌てて康ちゃんの頭を撫でた。

「意地悪言つてごめんね、愛してるって言われて照れただけなの」

いや本心じゃないのはわかつてるけどさ！ それでも照れちゃうでしょう!? ……あ、あいしてる、だなんて。

「本当か？ もし凧子がセックス嫌なら、……もうしない」

「え、ええと」

「我慢する……」

シユンとされた。ああもう、面倒くさいなあ。

「もう、バカ康ちゃん、嫌じゃないよ」

まだちよつとシユンとしている彼の唇に、ちゅ、とキスをひとつ。

「むしろ、……すき、だよ？」

康ちゃんとの、えっち。すごい、……キモチイイもん。キモチイイだけじゃなくて、……ちゃんと大切にされてるってわかる、っていうか、うん。なんか照れるなあ！
当の康ちゃんは、なんだか呆然としている。

「康ちゃん？」

「凧子からキスされた」

「……？」

「好き、とも言われた」

いやまあ、言っただけども。

「康ちゃん？ おーい」

「凧子」

康ちゃんは私の頬を両手で包む。

「な、なあに？」

「愛してる」

「だ、だから……むぐう」

ちゅ、と唇を塞がれて、ぬるりと舌が入り込んで、きて。

(な、流されてる気がするっ)

プロポーズ以降、こんな感じなような……

「愛してる」

まっすぐな瞳で、なんだかとても幸せそうに言われて。

どうしてだか——私も、不思議なことに幸せな気持ちになってみたり、少しだけ笑いかけてみたり……したのでした。

7 腹立つなあ、もう！

新婚旅行から帰ってきて、三日後。

「片付かないねえ」

私はパソコンのキーボードを打つ手を止めて、小さく独り言を呟いた。

片付かない。全然片付かない。引越しの荷物。えーと、仕事、溜まってたんだもん。自分に言い訳をして、またキーボードを叩く。今の私は、潰れた会社の取引先の契約社員。在宅でできるから、ちよつと助かってる。週に一回は、出社するけれど——

新居は横須賀市内のマンション。康ちゃんの職場の官舎もあるらしいけれど……そういうところ向いてなさそうだからなあ、って理由で、素直にマンションを借りた。その、引越したばかりのマンションのインターフォンが鳴る。

(あ、届いたかな?)

新婚旅行で買った、お土産たちだ。宅配にしたので、そろそろ届くかなと思っていたのでした。予想通り、それはマカダミアナッツだの、ボディークリームだのが詰まった段ボール。引越しの段ボールが片付かない部屋に、それも置いて——あ、と思い出した。

友達に無事帰国しました、って言ってないや。さすがにお母さんとかには連絡したけれど——友

達みんな、私が海外に行くことをものすごく心配していたからなあ。

『カモがネギ背負って海を渡る』

『いい、凧子。一ドルは一円と違うんだからね！』

……みんな、私をなんだと誤っているんだろう。

とりあえず段ボールから何個かお土産を引つ張り出して、机に置いてばしゃりと写真を撮る。それを少しだけ加工して、SNSに投稿した。

『帰国しました。無事です。お土産渡しに行きまーす』

そのあとは仕事に集中して、さて休憩……と思ったら、スマホに結構な数の通知がきていた。

『カードの明細よく見ておくように』『いくらスられた？』『無事でなにより』

失礼なコメント（もちろん仲良いから冗談だつてわかる）に混じって、お祝いの言葉ももらう。

『新婚旅行、どうだった？』『結婚式すぐよかつたよ。写真送るね！』『イケメン旦那さんの写真も上げて！』

む、イケメンと言われると、うん、なんか面映い（おぼほ）ですね。返信しようとしていると、また新着コメント。……うげえ、元カレだ。

『は？』

私はその文字をじつと見つめて、べえつと舌を出した。なによ「は？」って、「は？」って！

失礼だよなあ、あんなふり方しておいて……。失業したばっかの彼女に「オレに寄生すんなよ」ってめっちゃくちやだよ。する気もありません、だつての。

と、スマホが震えた。……おお、その元カレ、裕之（ひろゆき）からだ。どうしよ。考えあぐねているうちに、通話は切れて……。またかかつてきた。もー、めんどくさいな！

「もしもし！」

『おい、凧子。あれなんだよ』

「なんだよって、なに」

『新婚旅行って』

「新婚旅行だよ」

『は？ 知らねーんだけど』

「え、なんで教えなきゃいけないの？」

私は電話越しだというのに、首を傾げる（かじ）。

「別れてるのに」

裕之はなんか、絶句してる。

「オレに頼るな、連絡するなって言ったのそつちだよ」

『……いやでもさ、普通。仕事見つかったら元サヤじゃねえの』

「知らないよー。私はもう連絡するなって言われたから」

ふんすかと私は唇を尖らせる（とが）。だいたい、あれから何ヶ月経ったと思ってるんだろう！ もうすぐ一年経つてば！

「他に用事ある？」

『……ないけど』

「じゃあ切るね〜」

『いや、ちょっと待——』

つーつー、って機械音。またかかってくるかな？ と思っただけれど、もう着信はなかった。うん、よし。

晩ご飯をひとりで食べ終わった頃に、康ちゃんが帰宅してくる。

「おつかれさまー。今日も日本平和だった？」

「……スケールがでかいが、うん、おおむね平和だった」

「ただいま、と抱きしめられる。あ、少し——海のおい。」

「凧子」

少し、声のトーンが変わって。だから私も首を捻る。

「なあに？ なんかきりつとしちゃって」

「それがだな」

すぐにボケーつと、というか、まあ良く言えば肩の力が抜けた顔で康ちゃんは眉尻を下げる。

「転勤だ」

「てん、きん」

私はリビングを見回す。引越してきたばかり——片付いてない段ボールの山。

「……その、本当に申し訳」

「え、ラッキー」

私はぼちん、と手を合わせる。

「荷造りしなくていいじゃん」

「……まあ、それは」

「タイミング〜」

ぐ、とサムズアップしてみせると、康ちゃんはなんだか余計に弛緩した。あーあー、へニョへニョしちゃうって。でも本当にラッキーだ。これ開けるの、億劫だったんだよねー。

「グッジョブ、お国〜」

「国？」

「え、康ちゃんお国の命令で転勤なんですよ？」

自衛官は特別職国家公務員、のはずだ。

「……ううむ」

なんとも妙な顔をしてる彼に「どこなの？」と聞いてみる。

「あ、ああ。佐世保だ」

「佐世保？ 佐世保バーガー？」

「あとは三川内焼だとか」

「やきもの？」

その素敵そうな物は知らないけれど（食べ物？ ……って、陶器のほうかな）、佐世保が長崎な

のはわかります。

「角煮バーガー」

「食べ物しかないな」

康ちゃんはそう言いながら——少し安心したように、私のおでこにキスをしたのでした。

閑話 だってオレのなんだから（裕之視点）

ふ、とずっと連絡していない風子のことを思い出した。なんでって、ちょっと付き合ってた女と別れたから。まあ、正直に言うなら——やりたい。あいつ、今なにしてるのかな。連絡取るのやめてどれくらいだっけ？ ……半年以上は経つけども。正確には……九ヶ月、か？ まあ、まだ大丈夫だろ。大学のときからの付き合いだけけど、最長三ヶ月放置したことがある。けど、あいつポケーっとしてるから、オレの浮気にもその間の放置にも気付いてなかった。

『実験でなかなか連絡取れなくて』

『わお。そうだったんだ。大変だったねえ、おつかれさま』

そう言って笑う風子の雰囲気は、うん、嫌いじゃなかった。落ち着くし。あいつを抱きしめて寝ると、すげえ安眠できる。なんだろうな……。まあ、だから浮気してしまう部分はあったと思う。

刺激がねーの。あいつが「会社潰れた」ってヘラヘラしてたとき、ついイラっとして「連絡すん

な」とか言ったけど……まさかまだ就職できてない？ 半年以上経つぞ？

コツコツ貯金するタイプだったから、もしかしたらそれで旅行とか……？ うげ、なに勝手に使ってるんだろ！ 結婚したら、それもオレの金だよな!?

（SNS見てみるか）

旅行とかしてたら、さすがに写真とか上げてるだろ、と見てみれば、旅行は旅行でも……新婚旅行、に行っていたようだった。

「……は？」

思わずそのままコメントして、すぐ電話をかけた。は？ 結婚？

電話の向こうの風子は、とても不思議そうだった。切れた通話。オレは立ち尽くす。結局そのまま会社のやつにグチってみた。

「付き合ってた彼女が、勝手に他のやつと結婚した」

「はー!? ひどくねそれ!」

最初は同情してくれたのに。

「……それは普通に自然消滅だよ。ていうかフラれたと思うだろ」

「オレは就職するまで連絡して欲しくなかっただけ。オレに寄生して欲しくない」

「寄生？」

「それで結婚なんかしてみる。寄生虫みたいなもんだろ、そういう状態のオンナなんか」

同僚はイラっとした顔をした……そうだ、こいつ結婚して、嫁が専業主婦なんだ。あーあ騙され

てかわいそうに、ATMかよ。結局、他の友達にも相談したけれど、「それは別れたと判断されておかしくない」と結論づけられてしまった。

「いやその言い方されてさ、もう連絡なかったらフラれたなって思うよ普通」

女友達（肉体関係含む）にもそう言われて——でも、凧子はそのなんじゃないんだ。三ヶ月だろが、半年だろうが、少々酷いこと言おうが、浮気しようが、半年以上放置したって大丈夫な女のはずなんだ。——だった、んだ。

そうしてその後、ほどなくして——オレは長崎支社への転勤を言い渡されたのだった。

8 きみがいる（康平視点）

もうすぐきみに会えると思うだけで、家路がこんな楽しいなんて。だけれど、今日ばかりは少し気が重かった。

（……なんと言われるだろう）

急な転勤。いや、毎度のことだし、凧子にも伝えてある。……それでも、神奈川と東京以外に土地勘のない凧子にとつて、それは結構ショクな話なんじゃないかと。

（しかも、引越したばかりだ）

気が重い。最悪、……単身赴任……？ いやだ、凧子と離れたくない。

けれど、凧子のはのんびりと、いつも通りの笑顔で受け入れてくれた——から。

「っ、あ、ふあ……あッ、なんでっ、康ちゃん興奮しちゃったのお……っ!?」

ぱちゅぱちゅとイヤらしい水音が響く。凧子のナカに、俺は出たり入ったり、それがあまりに官能的でつい見つめてしまう。

「こお、ちゃん……っ、なに、見てるのっ」

俺によって素っ裸に剥かれて、ベッドで淫らに足を開いて喘ぐ凧子が最高に可愛い。凧子の両足首を持って、トロトロのナカを突きながら——淫猥なその情景を眺める。

「いや、——俺のが入ってると思って」

いまだに……もう何回抱いたかわからないくらいなのに、感慨深い。

「入れたの康ちゃん、じゃあん……っ」

その通りなんだけれど。腰を掴み直して、より深くに——ぱちゅん、と水音と一緒に腰の当たる音。

「っ、あああ……!!」

凧子の甘い、高い声。熱くて狭くて蕩けているナカが、きゅんっと締まる。

「いきそ？ 凧子」

聞いてみれば、凧子は涙目でこくこくと頷く。

「う、ん……っ、そこ、っ、きもちい、っ」

快楽に素直な凧子、めちゃくちゃ可愛い。瞳は潤んで、トロトロした顔で俺を見つめる。

「風子はイくの好きだな」

「ふ、あ……っ、うんっ、すきっ、すき……!!」

唇が緩む。風子の「すき」がとても嬉しい。……俺の「好き」と風子の「好き」は違う。けど、今は俺だけに向けられた「好き」。

「っ、あ、あんツ、はあっ、ああッ、あッ」

俺の動きに合わせて零れる、甘すぎる声。健気にきゅんきゅん縮まるナカ。

「っ、ふあ、っ、イ、くっ、こおちゃんっ、いつちやうっ、手、ちよおだいつ、手、繋いで……っ?」

「ん」

風子は手を繋ぐのが好き、みたいだった。いつからこんな風にイくのが好きなのかは知らない——知りたくもないけれど。風子の手を握る。トロトロの風子は、それでも嬉しそうに微笑んで——可愛いから、唇も重ねた。舌をねじ込んで。腰の抽送が、知らず速くなる。グズグズに蕩ける風子のナカが、痙攣するように締まって……俺も、気持ちいい。

「ふあ、ああ……!!」

唇を重ねていても、漏れる風子の声。風子がびくんと俺の手を握る、その綺麗な手に力を込める。同時にナカは蠕動するようにキュ、キュ、と締まった。ふわりと力が抜けた風子の、いったばかりのナカはまだピクピクと痙攣している。

(……可愛すぎか)

唇を離す前に、唾液を注ぐと、風子は抵抗もせずくくりと飲み込む。とろりとした顔のまま——風子の頭を撫でた。

「こ、ちゃん」

うっとり、つて顔で俺を呼ぶから——あ、だめだ、イく。ばちゅん、と腰を打ち付けた。

「っ、康ちゃん、っ、私、いったばっかあ、っ、休ませて……!!」

「うん」

風子の額にキスをひとつ。風子と結婚してわかったのは——風子はこう言う、けれど。

「でも風子、こうされるの、……好きなくせに」

「や、あ……っ、好き、じゃないもおんっ」

なんでここだけ素直じゃないんだろう。きゅんきゅんとナカは蠢いて、風子の腰は自分から動いていて。かぷりと鎖骨に噛み付いた。

「ああ……っ、あっ、あ……!!」

いったばかりで敏感になりすぎてる風子は、これだけでナカがピクピク縮まる。鎖骨を離してから、トロトロを通り越して——もはや気持ち良さで可愛くなりすぎてる風子の顔を眺めた。可愛いエロい。表現の仕方がわからない。

「風、子、俺も」

掠れた声でそう言う——風子のナカに打ち付ける。一番奥に、ただ本能のままに。

「っ、あ、あ……っ、あう、あッ、あ……イ、つちや、あう……あ……っ、あ……!!」

凧子から零れる高い声。ナカはもうドロドロに湧いて、でも健気に俺のを啜え込んできゅんきゅんと離さない。イッた凧子のナカの、吐精を促すその蠕動に、食いちぎられそうになる。

「……っ」

溢れそうになる声。薄い被膜越しに、どくどくと欲を吐き出して——気持ち良さにゆるゆると動く。その動きでさえ、凧子はびくと反応して。

「は、……あ」

可愛すぎて息が漏れる。ぎゅ、と抱きしめると、凧子もゆるゆると抱きしめ返してくれた。

「きもち、いい、ねえ」

「そうだな」

裸で抱き合う。腕の中で、凧子が幸せそうに俺に擦り寄る。思わず漏れた本音。

「愛してる」

「……ふふ」

凧子は少し笑って、俺の頬にキスをした。どういう意味、だろうか。ちゃんと伝わっているんだろうか。俺はきみを、世界一、おかしくなりそうなほどに愛しているというのに。——いや、もうおかしくなってしまったのかもしれない。好きすぎて。愛おしすぎて。

「凧子、愛してる」

「わかったってば、もう！」

凧子が擦るように笑って、俺はもう一度強く、彼女を抱きしめた。

たつぷり凧子を堪能した後の夕食、凧子の「冷蔵庫にあったものチャーハン」を食べていると、ハッと気が付いたように凧子が目を丸くした。凧子の前にはデザートプリン。

「どうした」

「そういえばね、別れるって言ってなかったからかなって思って！」

思わずびくんと身体を揺らす。わ、別れる？ なにが？ ——誰と！

「元カレがねー」

「元カレ」

やや安堵しながらも、唐突に出てきた「元カレ」という単語に胸がひりつく。元カレ……

「お昼くらいに急に連絡してきて」

「……ほう」

スプーンをテーブルに置いた。

俺の凧子
人妻になんの用事だ、元カレとやら。

「新婚旅行ってなんだよ、って急にキレたのね」

少し黙る。……先ほどの凧子の言葉。

「ええと、凧子。そいつと……別れてなかった？」

「別れてたつもりだったの。ていうか私がフラれたと思ってただけど」

首を傾げて不思議そうな凧子。

「……その元カレとは、連絡はとってたのか？」

「うん。最後に話したのがね、ええと……康ちゃんと久しぶりに会った日の前。ほら、赤煉瓦倉庫のところで」

凧子と再会したときか。……一年近く前だな？

「それは別れてるだろう。心配するな」

「そうかなあ。二股ふたまただったかなあ。ごめんね康ちゃん」

心配げな凧子の髪を撫でた。

「大丈夫だ」

おおかた、なんらかの理由でヨリを戻そうとしていただけなんだろう。それで凧子が結婚していたから、勝手に怒って……自分勝手なやつだな？ 知らない相手にムカついた。

「でもね、大丈夫だよ康ちゃん。別れてるよね、って言ったから」

「うん」

よしよしと髪を撫でると、凧子は気持ち良さげに目を細めた。

(……転勤があつて良かった)

二週間後には、凧子は佐世保だ。そいつと会うこともないだろう。

それより——つ、と凧子に視線を戻す。なあに、と凧子は首を傾かじげた。可愛い。

(大丈夫だよ、か)

その言葉がなんとなく、嬉しい。ふたたびスプーンを手にとって、チャーハンを口に運ぶ。凧子は嬉しそうに俺を見ている。

「康ちゃんは食べっぷりがいいねえ、作りがいいがあるねえ」

「そうだろうか」

「うん」

にここに、と凧子は笑う。

「覚えているか？ 高校のとき、これ、作ってもらったことあつた」

「えー？ そうだっけ」

凧子は不思議そうにしている。

「部活でへこんでるときに。凧子在家から手招きして、なにかと思ったら大量にこれ食わされて」

「あつは、あつたっけー」

「あつた」

あれは……救われた。本当に。

「えーと。あ、思い出した、康ちゃん初戦敗退したんだ」

ぐ、と言葉に詰まる。

「でも仕方ないよー。相手、結局全国優勝したんじゃない」

「……それは言い訳で」

「康ちゃんへこんでネバネバしてたから、お腹いっぱいにさせよって思ってた」

「……ネバネバ？」

ネバネバってなんだ？

「ウジウジが発酵してネバネバ」

「なんだか嫌だな、それ。」

「ほら、お腹いっぱい、限界まで食べたら大抵のことはどうでもよくなるじゃない？」

「……一理ある」

「でっしょお？」

「風子はほんわり笑う。」

「お腹いっぱいでもう吐きそうかどうかどうしようもなくなったら、大抵のことはどーでもいい」

「……ならなかったら？」

「むっ」

「風子は眉根を寄せた。」

「……それはもう、私ではどうしようもないので、各人で解決してもらわなくては……って、なに笑ってるの康ちゃん」

「風子のそういうところがツボすぎて、笑ってしまう。本当に、風子は風子だ。」

「こっちきて風子」

「なんで？」

「いいから」

「疑いもせず、ほいほい俺のところまで来る風子。俺の膝に乗せて、うしろ向きに抱きしめた。」

「わあ、なに？」

「お腹いっぱいになりたい」

「食べたらいいじゃん」

「まだ残ってるよ、と風子はテーブル上のチャーハンを指差す。」

「餃子もスープもあるよ」

「食べさせて、風子」

「えー」

「風子は「面倒くさい」って思い切り顔に書いて唇を尖らせた。」

「大人なのに？」

「大人でも、甘えたいときはある」

「堂々と言つと、風子は少し考えて、それから頷いた。」

「たしかに」

「な？」

「そだね、と俺を見上げた風子の唇にキス。そのまま風子の口内に、舌をねじ込む。プリン味の柔らかで、甘ったるい風子の口の中。」

「っ、ふあ……んッ」

「風子の、それより甘い声。少し薄い、可愛い舌を誘い出して甘噛みすると、風子の身体が小さく震えた。唇を離す。っ、と銀の糸。」

「……康ちゃん」

立ち読みサンプル
はここまで

「先に凧子にしようかな」

「さ、さつきもしたよ！」

「まだ足りなくて」

首筋にキス。そのまま甘噛みして、……ほんとに食べてしまいたいくらい。胸の、柔らかな膨らみに手を伸ばす。直接触れたくて、凧子の部屋着の裾すそからさつさと手を入れて——少し、笑った。モジモジと、凧子は足を動かしている。感じてくるくせに、と耳元で言うと、さらに顔を赤くして凧子は唇を尖とがらせて——俺にそっとキスをした。

9 揺れるピアス

海風が気持ちいい。海沿いの道に建っている、小さなロτζジみたいなお店が今日の目的地。

(ふっふっふ、口コミだと「超美味おおいしい」らしいからねっ)

佐世保に引越して二週間……と少し。引越し荷物もなんとなく片付いて、私は佐世保開拓に心血を注いでおりました。今日は人気店ということで、お店が混みそうだったから、あえてランチタイムギリギリの一四時半にやってきてみた。お店に入ると、他にはお客さんが何人か。ふふふ、予想通り！

「いらっしやいませ」

案内してくれたのは、綺麗なお姉さん、つて感じの店員さん。緩くまとめた茶髪がセクシー。耳たぶで、金のピアスが揺れた。カウンターの奥で、店長さんかな？ まだ若い男の人がにこりと笑った。無精髭ぶしよひげみたいなのが生えてて、でも不潔な感じじゃない。

ぐるりと店内を見回す。落ち着いたカントリー調の雰囲気、天井ではぐるぐると羽根が回っている。

「ご注文はお決まりですか？」

「ええと、このランチセットください」

ほどなくしてやってきたのは、分厚いバンズにこれまた分厚いパテやベーコンが挟まった、美味おおいしそうなハンバーガー。さてさて、ここはどんなお味かな？ 美味おおいしかったら、康ちゃんも連れてきてあげよう……と一口食べて、目を見開く。

(……美味おおいっ！)

な、なにこれ！ すっごい美味おおいしいよ!? 思わずバクバク食べ進める。セットのポテトやドリンクには気が回らなかった。とにかく美味おおいしい！

全部食べ終わって、食べちゃったらなくなるってことになりしと、ことんと目の前にお皿が置かれた。

「……？」

チーズケーキのお皿だ。ランチセットにはデザートは付いてないはず、と顔を上げると、店長さん(飯)と目が合った。